

O v e r V i e w

オーバービュー

Teppei Sugaya
管家 鉄平
華岡青洲記念病院心臓内科



私は CT 室に行くのが好きだ

もちろん、緊急患者の撮影時には必ず CT 室でリアルタイムに画像評価をする
が、それ以外にも外来の合間やカテーテル業務の時間が空いたときにふらりと
CT 室に顔を出し、放射線技師が忙しく作業をしているのを後ろから眺めながら、
唐突に話しかける。技師や CT 室の看護師にとっては迷惑千万であろうと思うの
だが、そんな自分をいつも優しく迎え入れてくれる（と勝手に思っている）。

当院の CT 室にはなぜか明るい未来を感じる。当然「最新の CT 装置やワーク
ステーションが備えられているから」ということもあると思うのだが、目の前の
患者さんの詳細な情報が瞬時にわれわれのシステムの中に入り込み、正しい知識
の元、洗練された技術と豊富な経験によって、患者さんが正しい方向へ、正しい
方向へと流れるように導かれる、そんな感覚なのである。

私にとって CT 室は、アイデアをぶつける場所であり、自分の中の確認作業の
場所でもある。どうすればもっと詳細に病態を把握できるのか、どうすれば PCI
という手技が今よりも患者さんのためになるのか、無知な自分が純粋な気持ちだ
けで無茶な要求を技師にぶつける。当院の技師は決して無理だとは言わず、それ
に対する基礎的な知識を丁寧に教えてくれたうえで、どうすれば私の無茶な要求
に答えられるかを一緒に考えてくれる。そのようなことを日々繰り返していると、
CT 技術の最前線に対する今の自分の知識レベルを確認することができる。

今回、冠動脈 CT をテーマとした企画立案の機会をいただいた。通常であれば、
情報の偏りがないように複数の施設の先生に執筆を依頼すべきところであるが、
本特集では方向性のブレが生じることがないように、全執筆を当院の医師と放射線



技師たちに依頼した。当院には、私が期待している以上のことを発信できる能力を備えたスタッフが揃っており、そして全員が同じ方向を向いて進んでいる。そのことを本誌の出版社であるメディアルファに相談し、ご理解いただいたため、今回の特集が実現した。本特集企画が皆様の日常臨床の一助となることを切に願っている。

当院のCT診療の取り組みについてお話しさせていただく機会があるが、「うちは総合病院なので、なかなかCTをそこまで活用できないのです。華岡青洲記念病院さんは単科の病院だからCTを自由に使えるし、放射線技師にも協力してもらえるから羨ましいです」と言われることがある。私はそのたびに「本当に恵まれています」と答えながら、実は内心ほくそ笑んでいる。何故なら、当院が開院する前からわれわれのチームは以前の勤務地で全く同様の取り組みを行っており、そこは総合病院だったからである。